

震災を振り返り

地域にいる者だけでは乗り切れなかった。地域の外からの人、物資、資金、情報などさまざまな支援のおかげで今まで立ち止まることなく進めて来れたのだと思う。今後は外部の関心が薄れて行く、支援の手が止まる、そのことにより被災地が孤立していくことが懸念される。被災地に目を向け、足を運んでくれることが重要で、これまでの支援に感謝すると同時に、今後もその支援を継続していただきたいと思う。



撮影：2011.5.13 松川浦

個人

いわき市

外で遊ぶ子どもの笑顔を見て、ママも笑顔になってほしい。

大平 ひかる オフィス・クワイ

取材日 2011.8.30

震災後、子どもを持つ母として「子どもが家に閉じこもって余震に怯えていたりするのは不自然。本来あるべき姿に子どもたちを戻したい」と思い、子どもを思い切り遊ばせるための「キッズオンパク」の取り組みを始めた。ソーシャルネットワークを通じて、自然学校や環境団体をはじめ多くの団体が活動を支援している。

3月11日 14時46分

いわき市は揺れの時間が最も長く、3分10秒（190秒）も続いた。湯本の町は崩れたりした箇所は無かった。その日はヨガのワークショップ開催に向け、先生を呼んで打ち合わせを行っていた。大きな揺れに驚きラジオをつけると、アナウンサーが「津波の高さは6m」「××地域の津波の到達時間は3時、3時は今です。」と叫んでいた。6mの津波と聞いてイメージできなかった。後からテレビを見て6mというのは2階建ての家を飲み込むほどのものであることに気づき、大変なことが起きてしまったのだと感じた。湯本だけに限れば、4月11日の地震の方が被害が大きかった。

キッズオンパクのはじまり

3月は避難していた子どもが多かった。30km圏外で避難していなくとも屋内待機していた。外で遊んでいる子はほとんどおらず、買い物に行っても子どもの姿を目にすることは無かった。母親達は情報の交流も無く、自分の家だけ子どもを避難させずにいるのか、他の家はどうかのか



と不安な日々を過ごしていた。4月になり学校が始まるため避難している人達が戻ってきた。残っていた人も戻ってきた人も不安な状態だった。子ども達と一緒にどこかで遊ばせ、その姿を見たお母さん達も元氣になればと始めたのが「キッズオンパク」だ。最初はスタッフ2名で始めた。「こんな時だからこそ子どもたちを思い切り遊ばせたい」と、NPO法人「いわきの森に親しむ会」の全面協力

のもと、「湯の岳山荘」を会場として使わせてもらっている。

山荘内、屋根付きデッキ、屋外、森の中（NPO法人「いわきの森に親しむ会」の案内付き）、どこでも自由に遊んでいい。屋内、半屋外、屋外と3カ所の放射線量をガイガーカウンターで計測し黒板に数値を記入し、どのエリアで遊ばせるかについては保護者の選択に任せた。食事は山荘にある石窯でピザやおやきを焼いて食べた。お昼ご飯の持ち寄りも呼びかけ、食べる・食べないの判断もそれぞれの家庭にゆだねた。自己判断、自己責任を基本に開催している。自分の子どもも遊ばせたいし、子ども達が笑っていればいいという思いではじめたが、続けていくうちに「洗濯物はどうしてる?」「野菜は買って食べてるの?」「水はどうしてるの?」と、お母さん同士の情報交換の輪が自然とできていた。小学生を対象にと考えていたが、回を重ねていくうちに小さい子どもたちも増えてきた。参加者は、最初は30人程度だったが今では100名を超えている。ブログを見て関東の団体がボランティアで来てくれたりもした。子どもを連れてきたお母さんにお手伝いいただくことを前提に、スタッフはほとんど2名だけで運営してきた。

支援の環

キッズオンパクの子どもたちのためにと多くの支援があった。ホールアース自然学校をはじめ環境団体からの支援の他に、震災後いわきにボランティアで来てくれた団体とtwitterやFacebookを通じて親好を深め、情報交換を行い、スケジュールが合えばお手伝いに来てくれた。遠くから来た人達は常に、こちら地元の動きを追ってくれている。本当に凄い事だと思う。この間も九州からいわきのお祭りにわざわざ踊りに参加しにきてくれた。

今後について

キッズオンパクは、最初は子ども達を遊ばせる場所を作ることを目的に始め、次第にお母さん達の

交流の場にもなっている。お母さんが笑っていないと子ども達にも影響してしまう。不安を抱えるお母さん達の心を和らげるために、子どもだけではなくお母さん達を対象とした交流の場も必要だと感じている。

参加者の中からは、いわきは比較的放射線量が少ないので福島や郡山の子ども達をいわきに呼んで遊ばせてあげられないだろうかという声も出てきた。これからは子どもたちだけではなく、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも含めて、子どもたちをどうやって守っていくか、子どもたちをどう育てていこうかという方向にも目を向けなければいけない。内容の見直しも考えなければいけない時期だと思っている。



撮影：2011.6.4 外で元気に遊ぶ子どもたち



撮影：2011.6.4 お母さんたちが協力してお昼を準備